



ホーム > 世界 > 南アジア・インド    オリッサ州    報告3

一緒に歩もう！一緒に変わろう！「立ち上がった世界の人々」の21世紀の夢を応援しよう！

プログラム内容

報告1  
2011年2月

報告2  
2011年12月

報告3  
2012年2月

報告4  
2012年7月

報告5  
2012年後期



## ～2012年後期・活動レポートと2013年の展望～ 学校:新しい教師のもとで、学びの進展

昨年、1月に村人たちの手で作り上げた小さな教室で、オディッサ州の山あいの村の子どもたちは学びを続けました。

前回のレポートで、経済が急激に拡大しているインド社会を反映した出来事として、自分を試すことができ、より高いお給料の仕事につく可能性を目指して教師を辞任し都会に出た先生の報告をしました。

その後継者が雨期明けの9月に見つかりました。地元出身のスルジットさんです。子どもたちは、オリア語、英語、算数の学びを再開することができました。

その結果、12月までに半数以上の子どもたちが、オリア語の文字の読み書きと簡単な足し算、引き算が出来るようになりました。みんなが楽しんで、英語のアルファベットを読み、そして書くこともできるまでになりました！ 12月には子どもたちみんなが参加して楽しい集会が開かれました。お母さんたちが作ってくれたご馳走に、みなが舌鼓を打っている様子です。



## 2013年、村の学校の未来に向けて

オディッサ州の山あいの村で活動を続けるナヤクさんの団体エベネゼルでは、2013年の年明けに今年一年の計画を立てました。昨年、長い間、村のことを心に留め、祈り続けてきたナヤクさんと村人の念願がかない、日本の方々からの支援で簡易教室が完成しました。次は、この学校の将来の運営方針を決め、そのために動き出す一年になります。

児童数が少ないので自治体運営としては認可してもらえないため、ナヤクさんたちは、それ以外の可能性を検討して村人とも話し合った結果、4-5年後には村人たちが経済的に向上し続けるインドの人々からの支援で自主運営できるように移行していくという案を選びました。



「人と社会のトータルな変革プログラム」の活動3年目。大きく変貌を遂げるインド社会で取り残されている地域の村で、「同胞のインドの人々と共に考え、取り組んでいく」という、今までには考えられなかった挑戦に取り組み始めました。

## 女性自助グループの活動

2012年後半も、16人の村の女性たちが2つのグループに属して、手にスキルを身につけるための活動を続けました。

練習を続けると、バナナの葉から作る伝統的なお皿やカップを、かなりうまく作れるようになりました。すると、話を聞きつけた町の店主が、ある日訪ねてきて製品をじっくり眺めた後、注文したいと言ってくれたのです。自助グループを始めて1年以上経ち、どうしたらより定期的な収入を得られるのだろうと模索していたところでした。この注文に自助グループの女性たちは、自分たちの製品への自信を深めました。

子どもたちや家族のために自分ができることが一つ増えたのです。みんなで一緒に励ましあう自助グループの成果も感じられました。2013年の歩みをみな、楽しみにしています。

## 山の村に引っ越してきたスリヤ牧師の願い - 2013年に力を注ぐこと

前回のレポートで報告したように、昨年後半、便利な町の生活をあとにして、スリヤ牧師は電気も水道もない自給自足の生活が当たり前の山あいの村に、家族と共に引っ越してきました。この村の人々と交わりながら、村の未来が変わるのは、この村の若者たちが自分や家族のことだけでなく、村やこの山あいの地域全体を理解しより良くしたいと願い、自ら行動する本当のリーダーシップを身につけたときだと、スリヤ牧師は確信しました。そして、2013年始めには、自分と周りにいる人々のリーダーシップの一層の成長のための研修を受けました。

2013年には、学校の保護者数人も含めて若い世代で、村の人たちに信頼されている10人を選び、リーダーシップ育成を始めることにしています。若い世代の育成は、エベネゼルの代表、ナヤクさんにとっても大きな願いの一つです。数か月おきに、スリヤさんからその経過報告が日本の皆さまに伝えられる予定です。乞うご期待ください。

## 日本で考えること・祈ること

日本は戦後の高度経済成長時代とそれ以降、60年近くにわたって、工業化推進のため都会での生活基盤の近代化が優先され、都市の過密、都市化という現象が起きました。その一方で、都会から遠く離れた地方では、どんどん人口が減っていくという過疎を経験してきました。60年以上たった今、これらの村々の一部は、間もなく人がいなくなる「限界集落」になったと言われています。すでに、誰も住まずに荒れ果てたところも出てきています。

今、「高度経済成長」という言葉に、日本の私たちはあの頃の活気を思いだし、懐かしさを感じるがあります。同時に、経済成長優先で引き起こされた公害などの負の側面のために、健康を害した多くの人々の痛みを思い出します。この「高座経済成長」を文字通り、「今」生きているのが、現代の中国であり(PM2.5というディーゼル排気に含まれる微小粒子状物質が、地球上を回る大気に乗って日本に到達し、日本にとっては公害が過去のものでなく、温暖化と同様に世界中の隣人たちとこの空気を共有していたことを痛感するこの頃ですが。)、数年後のインドでしょう。

人とモノを密集させ最大効率化することで生み出された「高度経済成長」には、光と影があることを私たち日本人は過去何十年も経験してきました。「高度経済成長」を経験し始めたインド社会の「山あい」の村が十数年後に経験する可能性があるのが「過疎」です。地域を離れがたいお年寄りだけが暮らすようになっているかもしれません。

日本では、近年、自然の豊かさや新鮮な食料供給という新しい視点で地方を見直し始める動きも出てきました。

オディッサ州の山あいの村の未来は、どうなるのでしょうか。過疎か。そこまで人口が激減することなく、新しい地域社会作りが始まるでしょうか。その鍵となるのが「若い世代のリーダーシップ育成」だと思えてなりません。

インドの山あいで格闘して未来を作り上げていく世代との交流を通して、日本が戦後の「高度経済成長」にたどった光と影の学びを共有しあい、インドの方々自分たちの未来に第3の道を選択して切り拓いていけるように刺激しあう21世紀のパートナーシップを構築できれば、と心から願っています。

## 祈りの応援依頼

世界に類を見ない貧富の格差を抱えながら大きく変貌していくインド社会で、オディッサ州の山あいの村人、スリヤ牧師、そして、支援団体エベネゼルとナヤクさんが2013年、新たな挑戦の道を歩み始めました。彼らの格闘の成果がインドの辺地といわれる地域に暮らす他の地域の方々にとっても、朗報となりますように。

[Share](#) |

[ホーム](#) [活動内容](#) [FVIの特徴](#) [参加する](#) [寄付・献金](#) [お問い合わせ](#)

Copyright(c) Friends with the voiceless International All Right Reserved

